NPO 2016年度事業計画について　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2016年5月25日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　関根龍太郎

１．2015年度活動総括

* 田口論文を完成させ、4月3日のシンポジウムを開催することができた。シンポジウムには190名の参加があり、50名の新規賛助会員を得た。1年目として大きな成果を上げられたことは評価できる
* 一方、シンポジウムは「瓢箪から駒」のできごとで、結果から見ると、NPO　一年目の実力には多少分不相応のところがあった。論文作成過程での共通認識不足、シンポジウム準備過程での不手際などにより複数の退会者を出した。このことから、中長期的な目標が共有されていなかったこと、運営が場当たり的となったこと、論文作成プロセスの共通認識ができてなかったこと、決定や事務連絡が一元化されていなかったことなどの運営的課題が残り、理事会体制の再構築が必要となった。2年度以降の組織運営にこの経験を反映したい

２．2016年度以降の活動方針

* **2年目の課題**①中長期的目標とそれに連動する単年度計画　②組織運営の改善（充実した理事会の議論、出版につながり参加者が楽しめる研究会の開催、ホームページを通じての協力者つくり）　③論文作成のルールつくり　を挙げたい。分不相応のイベントをすることは考えず、将来の出版に向けて着実に研究成果を上げ、参加者・賛同者を増やしていきたい
* **NPOが目指すもの**　NPOの目指すものは「田村明のまちづくりの客観的・科学的な解明と発信」を通じて、まちづくりをよりよいものに変えて行くことである（研究発表は手段である）ことを共通認識する必要がある
* **中長期的目標とそれに向けた単年度活動計画**3年後（5年後になるかもしれない）に英文で「田村明のまちづくり（仮題）」を発行すること（そのためにはそれに先立ち日本語版をつくること）を中長期的な目標に、そのための準備作業を計画的に行なう。田村明のまちづくり」を世界に向けて発信するためには、何をいわなければならないのか、何がいえなければならないのか、そのことから逆算して、そういう成果に到達できるように年度活動計画を組み立てる
* **理事会運営**　理事会は、まず、組織運営について十分な時間を取って議論する必要がある。個々の研究会を通じて明らかにされる事実をどのように今後の活動に結びつけるのか、という議論をすることが大切である（どこにどういう事実が埋もれているかわからないのだから、一種の「鉱脈探しゲーム」である。理事者は「掘る」ことに埋没するのではなく、「鉱山経営」をする）。1年目の反省から、論文作成のルールを明確化する、研究会を充実させ参加者（賛同者）を増やす、ホームページで目標・年度計画・活動内容を発信する、というような組織運営に力を入れたい
* **日常的活動**　年6回程度の公開研究会を開催するとすると、その構成を将来の出版に結びつけるようにする必要がある。賛助会員が期待するものは何か、それに応え、活動そのものに巻き込みたい。賛助会員には研究会に出席してもらい、接触を深める。研究会は、賛助会員も楽しめる内容のものとしたい（研究会でアンケートを実施する？）

３．2016年度活動計画

* 理事会体制を再構築し、中長期的目標実現のための議論を継続する（年12回はやや過重か？　研究会を開催しない月の6回＋αか？）
* 将来の出版を念頭に置いて、「幹」に当たる部分の研究をしながら次第に「枝」を広げていく。16年度は、「六大事業実現に向けた企画調整局の取り組み」「田村明の個人研究」を「幹」とし、時代背景と六大事業実施過程のアウトラインを探り、本出版に必要な内容を明確化していきたい
* 年6回程度の研究会を開催し、3～4回は「六大事業」関連、あとの2～3回はそれ以外のものとする（必要があれば追加する）。年度の終わりに、1年の成果を公表するような機会を設ける
* 論文作成のルールをつくる
* 賛助会員の関心を知り、活動に反映させたい（NPOが何をやるのか明確化し発信することが前提）
* ホームページからの発信（双方向的含む）を充実する

以　　上